

英語の名詞＋名詞複合語における強勢位置の変異と 限定的規則性

高尾 享 幸

要 旨

英語の名詞＋名詞複合語の強勢位置には、従来から認められてきたように、著しい変異が見られ、一つ、あるいは、ごく少数の規則により例外なく規定することが非常に難しい。これまでに、そのような規則、また、例外を一般的なしかたで扱う分析が提案されてきたが、完全に成功しているとは言いがたい。この論文では、名詞＋名詞複合語の強勢位置にカテゴリカルな規則だけによってではなく、アナロジーや情報性にもとづいた他の仕組みも合わせて働いているという考え方に従って、英語の発音辞典から採取した比較的多数の例をもとに名詞＋名詞複合語の強勢位置には規則性が見られると同時に、どの規則性も名詞＋名詞複合語全体には及ばず、限られた範囲に留まることを示す。

I. はじめに

英語において最も生産的な形態論のプロセスの一つに、名詞と名詞の複合 (compounding) がある。英語の辞書や文法書あるいは英語の語形成の教科書を開けば、名詞＋名詞複合語の例が多数記載されているだけでなく、絶えず新しい語が複合により造り出されている。例えば、アメリカ方言学会 (American Dialect Society) が選んだ2016年のワード・オブ・イヤー (word of year) は、dumpster fireであった。⁽¹⁾Plag (2002: 132) は、複合は英語において最も生産的なタイプの語形成プロセスであるが、同時に言語分析の観点からは最も問題の多いものだろうと述べている。このことは、その音韻についても当てはまる。英語の複合語の強勢位置については、現代の英語音韻論研究の初期の頃から分析が行われており、さまざまな説が提案されているが、今なお根本的な点についてさえ意見が分かっている。この論文では、英語の名詞＋名詞複合語の強勢位置にどのような規則性が見られるのか、また、それらの規則性が見られるのは名詞＋名詞複合語一般、あるいは、明確に定義される特定の下位類なのか、それとも、明確な定義ができない事例の集合であるのかについて考察する。この考察は、比較的最近出版された英語発音辞典から採取した比較的多数の例に対する体系的な調査にもとづいて行われる。その結果、英語の名詞＋名詞複合語の強勢位置には、いくつかの規則性が見られるが、どの規則性も名詞＋名詞複合語一般あるいは特定の下位類に成り立つというのではなく、範囲が明らかでない複数の事例に広がって見られることが示される。

次のⅡ節では、英語の名詞＋名詞複合語の強勢位置を決める仕組みとして提案された四つの説を概観する。その後、Ⅲ節ではこの論文での調査のために集めた事例を四つの分析が示す観点から考察する。最後に、Ⅳ節で結論を述べる。

II. これまでの分析

名詞+名詞複合語の強勢位置を説明するためにこれまでに提案されたアプローチは大きく四つに分類される。四つのアプローチとは、構造にもとづく分析、意味にもとづく分析、アナロジにもとづく分析、情報性にもとづく分析である。上述のように、名詞+名詞複合語の強勢位置には少なくとも一見したところでは恣意的と思われるような変異がしばしば見られる。これらのアプローチを検討する際には、この変異がどのように扱われているかに注目することが重要になる。

構造にもとづくアプローチとは、統語構造に見いだされる形式的な特徴や関係に依拠して複合語の強勢位置が定められるという考え方である。このアプローチの初期の代表に、Chomsky & Halle (1968) が示した分析がある。black board という句と複合語 blackboard は、音韻論において異なる扱いがされなければならない。black board では右側の音節 board に第一強勢が置かれるのに対し、blackboard は左側の音節 black に第一強勢が位置するためである。Chomsky & Halle (1968) は、この違いは適用される音韻規則の違いにより起こると考え、black board には核強勢規則 (the Nuclear Stress Rule) が適用されるが、blackboard には複合語規則 (the Compound Rule) が適用されると分析している。この二つの規則は適用領域が異なっており、核強勢規則は NP を適用領域とするのに対して、複合語規則は N が適用領域になる。そして、彼らは “[T]he syntactic categories indicated in the surface structure, are necessary for determining the correct application of the rules” (Chomsky & Halle, 1968 : 17) と述べている。その後の統語理論の改訂に伴い強勢位置を決める音韻規則がどのような種類の統語形式に言及するかは変わるが、統語範疇に依拠して強勢位置を決める規則が適用されるという基本的な考え方はこの後も継承されていく。例えば、Lieberman & Sproat (1992) は、複合語の強勢位置を決める規則は N^0 に適用され、句の強勢は N^1 に適用される規則により位置が決定されると論じている。言い換えれば、左方強勢は語彙的な形式である N^0 に与えられるのに対して、右方強勢は統語的な句である N^1 に付与される。しかし、このタイプの分析には例外が存在することがしばしば指摘されてきた。例えば、Madison Street, Boer War では左側の構成素が強勢を持つのに対して、Madison Avenue, Crimean War (Lees, 1963 ; Schmerling, 1971) のように右側の構成素に強勢が置かれる事例が少なからず見られる。統語範疇にもとづいて強勢位置が決まるという分析からは、前者は語であり、後者は句であることになるが、そのことが強勢位置とは独立に確かめられるか定かでない。確かに、右側の構成素に強勢が置かれるごくわずかの例について、それらが句であることが確かめられることはあるが (例えば、Lieberman & Sproat, 1992)、右方強勢を持った例が語でなく句であることを体系的に明らかにされたことはないように思われる。むしろ、例外のほとんどが統語的に観点からは句ではなく (Bell, 2005)、従来語と句として分けられてきた区別は意味的な違いでない (Olsen, 2000) と論じられている。さらに、語か句かを区別する複数の基準はしばしば互いに不一致を示し、名詞+名詞という連鎖が語なのか、句なのかを一義的に決定することができない (Bauer, 1998)。

より最近になって、Giegerich (2004) により新しい形の構造説を提案された。彼は、名詞+名詞の統語範疇ではなく、二つの名詞の構造的な関係にもとづいて強勢位置が定められると論じている。そ

れによると、左側の名詞（以下、 N_1 と表記）と右側の名詞（以下、 N_2 と表記）の間に補部と主要部の関係が成り立つ場合には、 N_1 に強勢が置かれる。一方、 N_2 に強勢が置かれるのは、 N_1 と N_2 の間に修飾部と主要部の関係が成り立つ場合に限られる。例えば、watch-makerは、 N_1 と N_2 が補部・主要部関係にあるため、 N_1 が強勢を持っている。それに対して、steel bridgeは N_1 と N_2 が修飾部・主要部関係を持っているため、強勢は N_2 に置かれる。さらに、windscreenやhand creamのような複合名詞も補部・主要部関係を持つものに分類され、 N_1 に強勢が置かれる事実が説明される。⁽²⁾また、glass caseのような同一の名詞連鎖でも、グラスを入れるケースという意味の場合には左方強勢を持ち、ガラス製のケースという意味の場合には右方強勢を持つ事実も説明される。これは、前者では N_1 と N_2 が補部・主要部関係にあるのに対して、後者では N_1 と N_2 が修飾部・主要部関係にあるためである。さらに、Giegerich (2004)は、修飾部・主要部関係を持っている複合語の中にも N_1 に強勢が置かれる例外的な事例を説明するために、通時的な語彙化というプロセスに訴えている。それによると、例えばpeanut oilは語彙化を経て、現在では語としての性質を備えるようになったため、 N_1 に強勢が置かれる。⁽³⁾Giegerich (2004)は、一つの複合語でも強勢位置に変異が見られるものがある事実に着目し、それは語彙化の途中の段階にあるために起こるとしている。例えば、orange squashは N_1 に強勢が置かれることもあれば、 N_2 に強勢が置かれることもある。これは、orange squashが語彙化プロセスの途中にあって、語と句の間で揺れているためであると言われる。したがって、Giegerich (2004)の分析に従えば、名詞+名詞複合語は、 N_1 と N_2 の間に補部・主要部の関係が成り立つ場合には必ず強勢は左側の構成素に置かれるが、 N_1 と N_2 が修飾部・主要部の関係にある場合には、 N_2 に強勢が置かれることもあれば、（語彙化により） N_1 に強勢が置かれることもあるということになる。次節でも示されるように、この分析には例外が見られる。ブラークらは、 N_2 の形態によってもこの分析の正しさが変わることを明らかにしている。それによれば、 N_2 が接尾辞-erを持った名詞である場合には比較的正しいが、それ以外の形（すなわち、-ing, -ion, 転換）を持つ場合にはそうではない(Plag, Kunter, & Lappe, 2007; Plag, Kunter, Lappe, & Braun, 2008)。

統語構造にもとづく分析は規則により強勢の位置を決めるという考えに立っている。したがって、強勢位置はカテゴリーカルに決定されるという経験的予測を内包していることになる。

二つめのタイプのアプローチは、構成素の意味にもとづくものである。この分析では、それぞれの名詞の意味特徴や二つの名詞の間の意味的關係に応じて強勢の位置が変わるとされる。このような考え方は、実際には、先に見た形式的構造にもとづく分析への代案として、独立に立てられるのではなく、構造にもとづく分析を補足するものとして、それと一体化されることが多い。特に、特定の構造的な分析では例外とされてしまう右方強勢を持つ名詞+名詞複合語を代わりに意味を用いて規定するという形が取られている(Liberman & Sproat, 1992; Olsen, 2000; Zwicky, 1986)。そのように扱うことにより、それらの例外を体系的なものとみなすことができるようになる。Plag (2006)によれば、どのような意味特徴あるいは意味關係が強勢位置の決定に関与するかは分析者の間で細かな不一致が見られるものの、右方強勢を持つ名詞+名詞複合語がすべて限られた意味を持ったものに制限できるという考えが共有されている。具体的には、 N_2 が N_1 を素材に作られている(例えば、silver box, wood chest,

silk tie), N_2 が N_1 と空間的に関係している(例えば, Boston márathon, neighborhood réstaurant, kitchen sink), N_2 が N_1 に時間的に関係している(例えば, spring shówers, summer dréss, Christmas dinner), N_1 , かつ, N_2 であるという関係(例えば, geologist-astrónomer, scholar-áctivist, gangster-bússnessman)などが指摘されている。

このタイプのアプローチは、構造的特徴に言及する音韻規則と特定の意味類を用いて一般的に定められた例外的な強勢付与との組み合わせによって名詞+名詞複合語の強勢位置が決められるという主張を内包している。したがって、それが正しければ、名詞+名詞複合語の強勢位置は規則に従うものと明確に定義された組織的例外に当たるもののどちらかであることになり、カテゴリアルなしかたで定められていることになる。

しかし、プラークならびに彼の共同研究者たちが、名詞+名詞複合語の強勢位置にはしばしば変異が見られるため、カテゴリカルなしかたでしか強勢位置を決められない規則にもとづいたアプローチには限界があることを明らかにした(Plag, 2006, 2010; Plag, I., Kunter, G., & Lappe, S., 2007; Plag, I., Kunter, G., & Lappe, S., 2008)。彼らは、電子コーパスを利用し、従来よりも遙かに大規模で組織的なデータ・セットに対する統計学的分析や事例にもとづいたモデル化を行って、統語構造や意味特徴にもとづく規則が非常に限定的な程度しか名詞+名詞複合語の強勢位置を正しく捉えられないことを示した。これを踏まえて、プラークたちは規則とは別の方法で複合語の強勢位置を予測できる仕組みを探究している。これまでのところ、アナロジにもとづく説(Plag, 2010; Arndt-Lappe, 2011)と情報性(informativity)にもとづく説(Bell & Plag, 2012, 2013)とが従来の分析よりも正しく強勢位置を捉えられるものとして提案されている。

名詞+名詞複合語の強勢位置に対するアナロジにもとづいた説とは、ごく平易に言えば、ある名詞+名詞複合語の強勢位置がそれと似た他の名詞+名詞複合語の強勢位置が当てはめられることによって決まるという考え方である。異なる名詞+名詞複合語の間の類似性には、どの点で類似しているかに関してさまざまな可能性があるが、プラークたちは構成素の共有という点での類似性に絞って考察している(Plag, 2010; Arndt-Lappe, 2011)。彼らは、同じ N_1 あるいは同じ N_2 を持った名詞+名詞複合語(構成素集団と呼ばれている)の間ではアナロジが働いて、同じ位置(すなわち、左側の構成素か右側の構成素)に強勢が置かれるという仮説を複数のコーパスから採集した比較的規模の大きいデータ・セットに照らして検証している。その結果、構成素集団間のアナロジにもとづく予測は、従来の統語構造にもとづく規則や意味特徴にもとづく規則からの予測よりもはるかに正確であることが示された。特に、左方強勢を持った名詞+名詞複合語については、この説は非常に高い程度の正確さを示した。

より最近になって、プラークはベルと協同で、情報性が名詞+名詞複合語の強勢位置の決定に貢献するという仮説を検証している。Bell & Plag (2012, 2013)は、 N_2 の絶対的頻度、 N_1 に相対化された N_2 の頻度、 N_2 の構成素集団の規模、 N_2 の意味的特定性とといった複数の観点から情報性を定義し、それぞれの意味での情報性が名詞+名詞複合語の強勢位置をどの程度正しく予測するかを比較的規模の大きいデータ・セットに照らして調査した。調査の結果、どの意味の情報性も、名詞+名詞複合語の

強勢位置を意味特徴や語彙化にもとづく分析よりも正しく予測することが示された。また、情報性にもとづく分析は、右方強勢についてアナロジにもとづく分析よりも正しい予測をすることも示された。特に、Bell & Plag (2013) は、アナロジにもとづく分析で用いたのと同じコーパスを用いて情報性にもとづく強勢位置の予測を調査し、右方強勢について上述の結果を得ており、注目される。

現在までの研究を概観すると、名詞+名詞複合語の強勢位置について二つのことが分かる。一つは、文法規則によるカテゴリー的な指定は、強勢位置の変異を十分にうまく扱うことができず、実際には存在しない、過度に強い一般化を与えてしまうことである。もう一つは、名詞+名詞複合語の強勢位置の決定には複数の要因が多重的に関わりながらも（時には競合しながら (Plag & Kunter 2010)), どの一つの要因もすべての事例について網羅的に働くことはなく、限られた範囲でしか規則性を生じさせないことである。これらのことは、プラークたちの優れた研究に負うところが大きい。しかし、彼らの研究は方法論的にも洗練されているが、量的な調査に傾倒していて、個々の例の分析は明らかでない面がある。以下では、プラークたちが用いたデータ・セットとほぼ同じ規模の異なるデータ・セットを用いながら、個別の例の分析に注意を向けながら、名詞+名詞複合語の強勢位置について彼らと同様の特徴が確かめられるかを考えてみたい。

Ⅲ. 事例の調査

前節で概観したように、これまで英語の名詞+名詞複合語における強勢位置に関して画一的な分析、説明が試みられてきたが、それに完全に成功した研究はまだない。これは、英語の名詞+名詞複合語における強勢位置に著しい変異が実際に見られるために、文法規則に要求されるような統一的な一般化を得ることが（不可能とは言い切れないとしても）非常に困難であることによる。しかし同時に、英語の名詞+名詞複合語の強勢位置にそのような著しい変異が見られることは、そこに何の規則性も存在せず、完全なカオスであることをもちろん意味していない。完全に統一的ではないにせよ、限られた範囲では規則性が見られる。そして、この部分的規則性にもある程度の多様性が見られる。このため、一つの規則とその例外という観点からこの事象を捉えようとする、有意義な規則性が見逃されてしまう。むしろ、まずは複数の種類の部分的規則性を見つけ出すことがこの事象の理解に有効であるように思われる。

この節では、英語辞書に記載された名詞+名詞複合語について網羅的にその強勢位置を観察し、それにどのような規則性が見られるかを調査する。名詞+名詞複合語の事例は、John C. Wells 博士が編纂し、ピアソン・エデュケーション社から2008年に刊行された *Longman Pronunciation Dictionary*, 3rd edition (以下、LPD3と表記) から採取した。ここでの調査は、この辞書から集めた6,140例の名詞+名詞複合語を対象としている。名詞+名詞複合語の採集に際しては、網羅的であることを第一の条件としたが、人や場所などの個体を指示する固有名(例えば、Mornington Crescent)、また、左側の名詞が数詞あるいは語彙範疇が名詞か形容詞か曖昧な複合語(例えば、forty winks, back-seat)は除いた。ただし、左側の名詞のみが固有名であるもの(例えば、Doppler effect)は加えてある。この6,140例のうち、左側に強勢が位置している例は5,344例(87.04%)であり、右側に強勢が位置してい

る例は796例(13.96%)である。この割合は他の先行研究とも似ている。Plag, Kunter, & Lappe (2007)は、辞書とテキストコーパスを土台に編纂されたCELEXという語彙データベースから4,491例の英語の名詞+名詞複合語を採集して調査を行ったが、その内訳は左側に強勢を持つ例が4,029例(89.7%)、右側に強勢を持つ例462例(10.3%)と報告されている。

III-1 構造にもとづく強勢位置

前節で述べたように、名詞+名詞複合語における強勢位置を決める因子として指摘されているものの一つは、 N_1 と N_2 の間の構造的関係である(Giegerich, 2004; cf. Giegerich, 2009)。Giegerich (2004)は、 N_1 と N_2 の関係を補部と主要部の関係と修飾部と主要部の関係に分け、補部・主要部関係を持った構造は語彙的な複合名詞であって N_1 に強勢が置かれ、それに対し、修飾部・主要部関係を持った構造は(通時的に語彙化したものを除けば)句であって N_2 に強勢が置かれる、と述べている。この一般化は、確かにLPD3からのデータ・セットでも多くの名詞+名詞複合語において確認される。例えば、(1)に示した例では、 N_1 に強勢が置かれる。

- (1) a. air-conditioning, cheeseparing, childminding, crop spraying, data processing, fire-fighting, mind reading, namedropping, prizegiving, seafairing, sportscasting, shareholding, stargazing, strikebreaking, winebibbing, winegrowing
- b. caregiver, caretaker, carpet-sweeper, cash dispenser, cement mixer, charcoal burner, childminder, decision-maker, dressmaker, fire extinguisher, fire fighter, fire-eater, flamethrower, foxhunter, innkeeper, lie detector, potato peeler, spycatcher, tearjerker
- c. bodyblow, carbon emission, child abuse, child care, childbirth, chimneysweep, coastguard, data capture, giftwrap, gunfire, haircut, handclap, headlock, heartattack, heartbreak, information retrieval, jailbreak, job share, labor exchange, paternity test

これらの例では、共通して N_1 と N_2 の間に補部・主要部関係が成り立っている。(1a)、(1b)、(1c)はそれぞれ N_2 の形態論的な違いに応じて分けられている。(1a)には、 N_2 が動名詞である例が示してある。これらの例では、 N_1 が N_2 の統語的補部に相当することが最も明らかであろう。他動詞と目的語名詞句の間には、主要部とその補部という関係が見られる。これは、補部・主要部関係の典型的な例である。例えば、read the mindという句において、動詞readは主要部であり、その補部は名詞句the mindである。 N_2 が動名詞である名詞+名詞複合語では、 N_1 がその補部であることが直ちに見て取れる。(1b)には、動詞に接尾辞-erが付加された派生語が N_2 である例が挙げられている。 N_2 が動詞から派生された名詞であるため、この場合も、 N_1 との間に主要部と補部の関係があることを容易に認めることができる。例えば、fire extinguisherには、extinguish firesと同様の補部・主要部の関係がfireとextinguisherの間にあると分かる。(1c)に挙げられた例が、おそらく、 N_1 と N_2 の間の構造的関係が最も見えにくい複合名詞であろう。しかし、これらの例でも、他の例と同様に、 N_1 と N_2 の間に補部・主要部関係が成り立っていることを認識することは、それほど困難ではないだろう。例えば、carbon emissionにおいて二つの名詞の間にemit carbonという句において動詞と名詞句の間にあるのと同じ

主要部・補部関係が成り立っていると考えられる。これは、emissionが動詞emitから派生された名詞であることを思い返せば、さらにはっきりするだろう。(1c)には他に、N₂が動詞からの転換(conversion)により派生された例も含まれている。⁽⁴⁾例えば、haircutのN₂であるcutは動詞からの転換により派生した名詞と考えられる。これらの例では、先の例と同様、N₂は動詞を基礎にしており、N₁との間に同じように補部・主要部関係が成り立つことが分かる。しかし、(1c)には、N₂が動詞からの派生名詞ではない例も含まれていることが、先行研究では指摘されている。例えば、ballistics expert, car thief, music critic, soccer fanは、N₂が動詞からの派生語でないが、N₁とN₂とに補部・主要部関係が認められている(Liberman & Sproat, 1992; Giegerich, 2004)。

LDP3から採集したデータ・セットには、上述の構造説に沿っている例も多数含まれている一方で、それとは合致しない例も見られる。例えば、下の(2)に挙げる例を考えてみよう。これらの例はすべて強勢がN₂に置かれる。

- (2) a. daylight saving, family planning, lifesaving, town planning
 b. camp follower, gas fitter, interior decorator, prison visitor, sheet feeder, squadron leader, speech synthesizer, stage manager
 c. air traffic control, neighbourhood watch, tax return, palace revolution, quantity surveyor, speech synthesis, speech therapist, speech therapy, system analysis, worldview

(2a), (2b), (2c)に示された例も、(1a), (1b), (1c)で挙げられている例と同じように、N₁とN₂の間に補部・主要部関係が成り立っている。したがって、構造説からは、その構造的関係を適用条件とする強勢付与規則が(1a, b, c)と同様に、(2a, b, c)の例にも適用されて、N₁に強勢が置かれることが予測される。しかし、この予測に反して、実際には(2)に挙げられている複合名詞では、N₂に強勢が置かれている。つまり、(2)に挙げられた例は構造説にとっては反例となる。

前述したように、Giegerich (2004, 2009) は、名詞+名詞を補部・主要部関係を持つものと修飾部・主要部関係を持つものに分類し、前者には語彙的強勢付与規則が適用され、後者には句レベルの強勢付与規則が適用されると論じている。彼は、さらに、修飾部・主要部関係を持っている名詞+名詞を二つに下位分類して、語彙化されていないものと語彙化されたものを区別し、語彙化されていないもののみ先に述べた句レベルの強勢付与規則が適用されると述べている。すなわち、統語的に修飾部・主要部関係を持った名詞+名詞複合語がすべてN₂に強勢を置くのではなく、そのような構造的関係を持った名詞+名詞複合語でも語彙化されていればN₁に強勢が置かれる可能性があることが認められている。したがって、Giegerich (2004, 2009) の分析では、修飾部・主要部関係を持った名詞+名詞複合語は、強勢位置が構造的関係だけでは決まらず、語彙化の有無という通時的要因も関わっているとされる。言い換えれば、修飾部・主要部関係を持った複合語には語彙化により生じた例外の存在が認められている。しかし、構造的関係と強勢位置の関係に対する例外は、補部・主要部関係を持った名詞+名詞複合語には認められておらず、そこでは強勢位置が純粹に構造的関係に従って決められると考えられている。したがって、この説からは(2)で示された例の存在は予測されず、それらが右方強勢を持っている事実は説明ができない。

III-2 意味的性質にもとづく強勢位置

統語構造にもとづく強勢付与が英語の名詞+名詞複合語の強勢位置について必ずしも記述的に成功していないことは、II節で触れた通り、この分析が提案された時からすでに認識されていた。実際、語彙的な構造を持っているように見える名詞+名詞複合語のなかには、統語的に句である形式と同様に右側の語に強勢が置かれるものが多く存在している。しかし、これらの右方強勢を持った名詞+名詞複合語は複合語強勢規則に対する体系的な例外であって、明確に規定できる意味的性質を持つ限定されたタイプにしか見られないとしばしば主張される(例えば、Zwicky, 1986; Ladd, 1984; Liberman & Sproat, 1992; Olsen, 2000)。この説にとって重要となるのは、体系的例外を記述的に正しく規定できる意味類を明確に示すことができるかという点である。まず、意味類の定義の明確さについて考えると、現在までのところでは、それが十分に達成されているとは言えない。例えば、Liberman & Sproat (1992) はこれらの意味類を列挙しているが、その最後に「その他の例」として他の意味類には入らないものをまとめてしまっている。⁽⁵⁾この節ではこの後、提案されている意味類が例外を記述的に正しく規定できるかという疑問をLPD3からのデータ・セットに照らして考えてみたい。

この調査をするに際して、組織的例外が属する意味類として Liberman & Sproat (1992) が示した七つの意味類から「その他の例」というグループを除いた六つを考える。⁽⁶⁾その六つの意味類とは、(i) $N_1 + N_1$ から作られたもの(例えば、gold medal), (ii) N_2 が見いだされる場所 + N_2 (例えば、garage door), (iii) N_2 が起こる時 + N_2 (例えば、winter carnival), (iv) 固有名 + もの(例えば、Pennsylvania crude), (v) 測定尺度 + 測定されたもの(例えば、two-minute warning), (vi) N_2 のための方法あるいは媒体 + N_2 (たとえば、microwave popcorn) である。以下に示される通り、LPD3からのデータ・セットの中には、この節が予測する通り N_2 に強勢が置かれた名詞+名詞複合語が多く存在している。

- (3) a. $N_1 + N_1$ から作られたもの : apple pie, apple sauce, beef tea, brass knuckles, bread pudding, bread sauce, butter icing, chamomile tea, champagne cocktail, chocolate biscuit, chocolate pudding, coconut matting, concrete jungle, copper plate, custard pie, feather bed, feather boa, feather duster, fruit cocktail, fruit salad, funicular railway, gin sling, ginger ale, Iron Curtain, ivory tower, lemon curd, lemon squash, log cabin, milk shake, mince pie, mint sauce, mud pie, olive oil, plum pudding, pork pie, potato crisp, prawn cocktail, prawn cracker, rice pudding, rubber band, rubber dinghy, rubber stamp, sardine sandwich, soy sauce, suet pudding, tabasco sauce
- b. N_2 が見いだされる場所 + N_2 : bar billiard, bedroom slipper, bedside manner, backstage workers, ballroom dancing, bottom drawer, city hall, cottage industry, country dance, desert rat, front door, front page, front room, home brew, home movie, home rule, India rubber, Jerusalem artichoke, Lassa fever, pocket handkerchief, sea breeze, shop steward, shop window, stage door, stage whisper, street credibility, surface tension, top drawer, town clerk, upper-class accent
- c. N_2 が起こる時 + N_2 : bedtime story, Christmas pudding, Christmas stocking, day return,

- evening prayer, evening star, life imprisonment, midlife crisis, midnight sun, midsummer madness, morning glory, Morning Prayer, night watchman, Saturday night, spring fever, tomorrow afternoon, tomorrow evening, tomorrow morning, tomorrow night
- d. 固有名+もの : Adwick-le-Street, Christmas cracker, Colorado beetle, Exmoor pony, Fosbury flop, Gallup poll, Martello tower, Morse code, M?ssbauer effect, New Zealand flax, Norway spruce, Oregon grape, Portland cement, Portland stone, Rhodes scholar, Rosetta stone, Seville orange, Shasta daisy, Sheffield plate, Yorkshire pudding, Yorkshire terrier
- e. 測定尺度+測定されたもの : nine days wonder, second-generation Australian, seven-year itch, two-minute silence
- f. N_2 のための方法あるいは媒体+ N_2 : cable television, carbon copy, carbon dating, radio alarm, radio telescope, radiocarbon dating, test-tube baby, transistor radio

上に挙げた多数の例は、右方強勢を持った名詞+名詞複合語に意味の観点からの体系的であることを示していると考えられる。しかし同時に、LPD3からのデータ・セットは、この体系的例外に対しても、「測定尺度+測定されたもの」タイプを除いて、例外となる例がいくつか存在することを示している。それらの例を下に挙げる。

- (4) a. $N_1 + N_1$ から作られたもの : bergamot oil, barley sugar, blockboard, blockhouse, boiler plate, bone meal, breadcrumb, butterball, buttercream, butterscotch, chocolate cake, corn bread, featherbed, fishcake, gingerbread, glassware, gumball, gumboot, gumshield, gumshoe, ice pack, ice sheet, iceberg, ironclad, ironware, ironwork, jelly bean, jelly roll, leatherjacket, liver sausage, mustard plaster, oatcake, oatmeal, oil paint, oilcake, petrol-bomb, pineapple juice, plum cake, potato cake, potato chip, potato crisp, rice paper, sandcastle, sausage roll, steelworks, sugarloaf, waxworks, woodworks
- b. N_2 が見いだされる場所+ N_2 : barmaid, beach ball, beach buggy, beachchair, beachwear, bedbug, bedclothes, bedjacket, bedlinen, bedpan, bedsock, bellyache, belly button, bird flu, brainstem, breastbone, carphone, centerpiece, chamber pot, cheekbone, chimneypot, churchyard, doorbell, doorjamb, doormat, doorplate, doorpost, doorstep, doorway, dooryard, ear trumpet, eardrum, earache, eardrop, earflap, earpiece, earphone, earplug, farmhouse, farmland, fieldmouse, fingernail, fingertip, floor manager, floorwalker, footlight, footmark, frontbench, front-runner, front-wheel, garage sale, garden party, ground staff, groundhog, hallstand, harbormaster, headgear, headphone, headpiece, headscarf, hellfire, hipbone, homework, house husband, housecoat, housemaid, housemaster, housemate, housemistress, houseplant, houseware, housewife, housewifery, jailbird, kerbstone, kitchen-sink, kitchenware, kneecap, knucklebone, lakeside, landmine, laptop, lawnparty, marsh gas, meadowlark, mountainside, mountaintop, mouthpiece, neckband, necklace, necktie, neckwear, nest egg, office boy, office girl, parlour maid, pavement artist, poolside, riverbank, riverbed, riverboat,

- riverfront, roadtest, roadside, roomservice, safari suit, school boy, schoolchild, schoolday, schoolfellow, schoolgirl, schoolhouse, schoolkid, schoolman, schoolmarm, schoolmaster, schoolmate, schoolmistress, schoolroom, schoolteacher, schoolteaching, schoolwork, schoolyard, sea breeze, seabed, seabird, seacoast, seafood, seafront, seaport, seashell, seashore, seasickness, seaside, seawater, seat belt, skyjack, skylight, skyline, skycap, skydiver, spacesuit, stage fright, stage name, stage whisper, stair rod, station house, stationmaster, stomachache, storefront, street light, street value, table manners, table talk, table wine, tablecloth, tablemat, tablespoon, tabletop, tableware, taillight, tailpiece, tracksuit, trailbike, treehouse, trench coat, waistband, wallpaper, window seat, wristband
- c. N₂が起 ころる 時 + N₂ : birthday cake, birthday card, birthday present, Christmas box, Christmas cake, Christmas card, Christmas tree, day bed, day nursery, day school, day-care, daydream, daylight, daystar, Easter egg, lifework, morning coat, morning dress, morning sickness, night blindness, night school, night watch, nightcap, nightclothes, nightclub, nightdress, nightgown, nightlife, nightmare, nightrider, nightshirt, nightspot, season ticket, summer school, summerhouse, Sunday school
- d. 固有名+もの : diesel engine, diesel oil, Doppler effect, Dundee cake, Geiger counter, Hershey bar, Judas tree, Maundy money, Oedipus complex, Oxford movement, Pitot tube, Quonset hut, Rhodes scholar, Rhesus factor, Rorschach test, Seebeck effect, Swiss cheese, Tay-Sachs disease, UCAS form, Ulsterman, Union flag, Vichy water
- e. N₂のための方法あるいは媒体 + N₂ : Band Aid, bubble bath, body language, candlepower, chainsaw, bubble wrap, laser printer, motor scooter, motorbike, motorboat, motorcar, motorcoach, motorcycle, push-start, steam shovel, steamboat, steam-engine, steamroller, videoconference

これらの名詞+名詞複合語では、強勢が左側、すなわち、N₁に置かれている。特定の意味的特徴によって名詞+名詞複合語にしばしば見られる右方強勢を組織的例外として特徴づけようという試みは、上の(3)からも分かるように、かなりの程度成功していると言える。しかし、そのために示された意味類に属する名詞+名詞複合語を見ると、(4)が示すように、やはり左方強勢を持っているものも多い。もし示された意味類に属する名詞+名詞複合語は右方強勢を持つことができると修正すれば、(4)は意味にもとづく説の反例ではなくなる。しかし、指定された意味類に属する名詞+名詞複合語のうち、どれが例外的に右方強勢を持つのかという疑問が復活してしまう。そして、例外的に右方強勢を持つ例を一般的に規定しないままにするなら、もはや体系的例外とは言えなくなる。

Ⅲ-3 アナログにもとづく強勢付与

すでにⅡ節で述べたように、ブランクとその共同研究者たちは、形式的構造や意味的特徴に依拠した規則によっては名詞+名詞複合語の強勢位置をごく限定的にしか正しく捉えることができないこと

を踏まえて、名詞+名詞複合語の強勢位置を決める別の要因を探求している。彼らは、名詞+名詞複合語の強勢位置を決める、より強い要因としてアナロジと情報性があることを明らかにした (Plag, 2010; Arndt-Lappe, 2011; Bell & Plag, 2012, 2013)。この節では、名詞+名詞複合語の強勢位置の決定にアナロジが働いていることをLPD3からのデータによって確認できるかを考えてみたい。

Plag (2010) は、同じ構成素を共有している異なる名詞+名詞複合語の間にアナロジが働いて、ある複合語は構成素を共有している他の複合語と同じ強勢位置を持つようになる論じている。彼は、名詞+名詞複合語の構成素 (すなわち、 N_1 あるいは N_2) がどの程度、左方強勢あるいは右方強勢を持つかを表すものとして、構成素集団バイアス (the constituent family bias) という概念を用いている。構成素集団バイアスは、ある名詞+名詞複合語と同じ構成素を共有している、コーパス内の他の名詞+名詞複合語が左方強勢あるいは右方強勢を持っている割合によって示される。例えば、advertising business という複合語は、Plag (2010) が用いたコーパスの一つにおいて、advertising agency, advertising battle, advertising commentator, advertising costs, advertising days, advertising dollars の六つの複合語と N_1 を共有しており、これらと共に左集団 (left family) を構成する。また、その語は同じコーパスにおいて biotechnology business, computer business の二つと N_2 を共有しており、これらと共に右集団 (right family) を構成している。advertising business と N_1 を共有する六つの複合語のうち、五つが左方強勢を持ち、一つが右方強勢を持っている。したがって、この左集団が左方強勢を持つ率は $5/6$ 、すなわち、83.333% となる。上記の右集団についても同様の計算を行うと、この右集団が右方強勢を持つ率は $1/2$ 、つまり、50% となる。Plag (2010) はさらに、このようにして算出した構成素集団の強勢位置の率を左方バイアス、右方バイアス、中立の三つのカテゴリに分類している。構成素集団の左方強勢を持つ率が70%を越えるものは左方バイアス、30%未満のものは右方バイアス、30%以上70%以下のものは中立という値がそれぞれ与えられている。Plag (2010) は、この三種類の構成素集団バイアスが特に左方強勢と明らかな相関関係があることを、統計学を用いて立証している。

以下では、構成素集団バイアスがLPD3からのデータ・セットにおいても名詞+名詞複合語の強勢位置を決める要因として働いているかどうかを考えてみたい。最初に、このデータ・セットに含まれる名詞+名詞複合語で、同じ N_1 あるいは同じ N_2 を持っている語が二つ以上あるものをすべて構成素集団とみなした。例えば、 N_1 が racket である複合語は racketball, racketrail の二つである。これらは racket を N_1 とする構成素集団としてカウントした。他に、 N_1 が air である複合語は56あり、これらも一つの構成素集団としてカウントした。左方強勢を持つものでは、同じ N_1 を共有する構成素集団の数は916あり (母体となる複合語の総数は4,467)、構成素集団を構成する複合語数は平均すると5.10である。同じく左方強勢を持つもので、 N_2 を共有する構成素集団は775あり (母体となる複合語の総数は4,377)、構成素集団を構成する複合語数は平均で6.02である。右方強勢を持つ名詞+名詞複合語では、 N_1 を共有する構成素集団は138あり (母体となる複合語の総数は408)、構成素集団を構成する複合語数は平均すると2.92である。同じく右方強勢を持ったもので、 N_2 を共有する構成素集団は113あり (母体となる複合語の総数は317)、構成素集団を構成する複合語数は平均すると2.56である。また、

左方強勢を持った複合語では、 N_1 を共有する構成素集団のうち2ないし3語から成る構成素集団は全体の23.9%を占め、 N_2 を共有する構成素集団のうち2ないし3語から成る構成素集団は全体の20.8%を占める。一方、右方強勢を持った複合語では、 N_1 を共有する構成素集団のうち2ないし3語から成る構成素集団は全体の63.9%を占め、 N_2 を共有する構成素集団のうち2ないし3語から成る構成素集団は全体の74.0%を占める。したがって、このデータ・セットでは、左方強勢を持った複合語に比べて、右方強勢を持った複合語では構成素集団の規模が小さい。

では、強勢位置に関する構成素集団バイアスは、ここで用いているデータ・セットにおいて実際の強勢位置を反映しているだろうか。まず、左方強勢を持った名詞+名詞複合語から見てみよう(表1)。このグループの複合語で、 N_1 を共有する構成素集団の左方強勢へのバイアスは非常に高い。916の構成素集団のうち799(85.0%)が左方バイアスのカテゴリに分類される。全構成素集団の左方バイアスの率は平均すると88.3に達している。 N_2 を共有する構成素集団に関してもほぼ同様の結果が得られた。775の構成素集団のうち681(87.9%)が左方バイアスのカテゴリに分類される。全構成素集団の左方バイアスの率は89.0であった。これらの結果は、左方強勢に関しては、 N_1 を共有する構成素集団も N_2 を共有する構成素集団も強勢位置に関するバイアスが実際の強勢位置と非常に高い割合で合致していることを示している。構成素集団バイアスは、同じ構成素を持った複合語の間で強勢位置の決定にどの程度アナログが働くことを表している。したがって、左方強勢に関する限り、LPD3からのデータ・セットにおいて同じ構成を共有する複合語の間でアナログが働いて強勢位置が決められていることが示されたことになる。これに対して、右方強勢を持つ名詞+名詞複合語に関しては、構成素集団バイアスと実際の強勢位置の間にこれほど高い相関関係は見られなかった(表2)。これらの複合語の中で N_1 を共有している構成素集団(総数138)のうち、右方バイアスのカテゴリに分類されるものは39例あり、全体の28.3%を占める。全構成素集団の右方バイアスの率は平均で51.5である。 N_2 を共有する構成素集団についてもほぼ同様である。これらの構成素集団(総数113)のうちで右方バイアスを持つものは42例あり、全体の37.2%を占める。これらの構成素集団の右方バイアスの率は平均で53.84である。このことは、右方強勢を持つ名詞+名詞複合語に含まれる構成素集団において右方強勢へと導くアナログはほぼ五分五分の力しか持っていないことを示している。このような結果の一つの原因としては、左方強勢を持った名詞+名詞複合語に比べて右方強勢を持った名詞+名詞複合語がかなり少数であることが考えられるかもしれない。Plag(2010)とArndt-Lappe(2011)も、同様に、右方強勢に関して構成素集団内でのアナログにもとづく予測があまり高い正確さを持っていないと論じている。彼らは、特に、辞書を母体にして編纂されたコーパスから採集したデータでは、そのことが著しいことを報告している。したがって、データの種類がこの結果に関係していると考えられる。しかし、Plag(2010)、Arndt-Lappe(2011)では、他の種類のコーパスでも右方強勢においてはアナログにもとづく予測が実際よりも低いことが報告されている。したがって、右方強勢については、構成素集団内でのアナログによって説明される範囲が左方強勢よりも限定的であると言わなくてはならない。

表1 左方強勢を持つ名詞＋名詞複合語における構成素集団バイアス

	N ₁ を共有する構成素集団			N ₂ を共有する構成素集団		
	左方	中立	右方	左方	中立	右方
構成素集団バイアス (カテゴリ)	779 (85.0%)	84 (9.2%)	53 (5.8%)	681 (87.9%)	34 (4.4%)	60 (7.7%)
構成素集団の左方バイアス (平均)	88.3			89.0		

表2 右方強勢を持つ名詞＋名詞複合語における構成素集団バイアス

	N ₁ を共有する構成素集団			N ₂ を共有する構成素集団		
	左方	中立	右方	左方	中立	右方
構成素集団バイアス (カテゴリ)	41 (29.7%)	58 (42.0%)	39 (28.3%)	43 (38.1%)	28 (24.8%)	42 (37.2%)
構成素集団の左方バイアス (平均)	51.5			53.8		

III-4 情報性

プラークらが指摘する通り、言語表現の情報性が強勢に反映されるという考えは古くから存在する (Bell & Plag, 2012, 2013)。この考えは、言語において重要な、あるいは、予期されていなかった情報は強く発音され、その反対の情報は弱く発音されるという直観に支えられていると思われる。名詞＋名詞複合語の強勢位置が構成素である名詞の情報性の程度によって決められるという仮説にとって重要なことの一つは、情報性という概念が何であるかである。それには様々な定義があり得る。Bell & Plag (2012, 2013) は、先行研究を踏まえつつ、N₂の絶対的予測可能性、相対的予測可能性、意味的特定性という三つの点から情報性を定義している。ここでは、N₂の意味的特定性が強勢位置に影響を与えているかどうかをLPD3からのデータ・セットに照らして考えてみたい。プラークらは、ある語の意味的特定性を電子語彙データベースにおけるその語の類義語の数により量的に定めているが、以下の考察ではより直観的な判断にもとづいて緩やかに捉えるにとどめる。

これから考えたいのは、直観的に非常に意味的特定性が低いと判断されるいくつかの語をN₂に持つ名詞＋名詞複合語の強勢がN₁あるいはN₂どちらに位置するかという疑問である。もし構成素の情報性が強勢位置に決定する働きをしているなら、意味的な特定性が非常に低い、一般的な意味を持つ構成素には強勢が置かれなければならないはずである。果たして、この予測は実際どのくらい成り立つだろうか。この疑問に答えるために、まずデータ・セットに含まれる複合語のN₂から、人、物、場所、時という一般性の高い意味カテゴリに属する意味的特定性が比較的低いと思われる名詞を20語選んだ。選ばれたN₂を表3に示す。表3にはそれぞれのN₂がデータ・セットの中でいくつ見いだされたか、また、そのうちN₂自体に強勢が置かれている(すなわち、右方強勢の)複合語がいくつ見いだされたかが記してある。例えば、manの場合、171の複合語にN₂として現れており、そのうち右方強勢を持ったものが二つある。この表が示すように、20の意味的特定性が低いN₂のうち、12がすべて左方強勢を持ち、右方強勢を持った8つのN₂でも一つないし二つである。これらのうち、最も右方強勢の割合が高

表3 意味的特定性が比較的低いと判断された N₂

人	man (2/171), woman (0/38), boy (1/27), girl (1/15), fellow (0/3), goer (0/8), holder (0/17), maker (0/36), owner (0/3)
物	piece (1/17), set (0/10), stuff (0/2), ware (0/13)
場所	house (1/60), land (0/28), place (0/5), room (1/49)
時	day (2/22), hour (0/5), time (2/29)

い N₂ は day で 9.09%, time が 6.90%, girl が 6.67% と続く。これらの事実から、一般的に言って、意味的特定性の低い名詞が N₂ に来る場合には、その N₂ が強勢を担うことは稀にしかないと分かる。これらの複合語のうち例外的に右方強勢を持ったものを(5)に示す。

(5) fellow man, straw man; baby boy; baby girl; set piece; country house; front room; Christmas Day, Easter Day; Father Time, peak time

これらの複合語が N₂ に強勢を置いている理由は分からない。特に peak time については、筆者には説明がつかない。しかし、残りの例については、それが完全に恣意的ではないと思われる理由を指摘することができる。この理由は二種類に大別される。一つは、意味に関連する理由である。baby boy と baby girl は乳幼児を男の子か女の子かを区別して表している。⁽⁷⁾もし性別が関連性を持たないコンテキストなら単に baby が用いられる (例えば, What a lovely baby!)。また、この二つの複合語は意味的に対立していることが際立っている。それに対して、他の boy または girl を N₂ に持つ複合語は、すべて特定の社会的な役割や立場にある人を指す表現で、この役割や立場が N₁ により示されている (例えば, liftboy, salesgirl)。さらに、字義通り年少の男子、女子が意味されていない場合が多い。Christmas Day, East Day は、Christmas week や Easter season と区別して特定の日を限定的に指す場合に用いられる。Father Time は修辭的な表現で、老人に擬して過ぎゆく時自体を表現である。これは、time を N₂ に持つ他の複合語において限定された特定の時間帯を指す用法 (例えば, teatime, injury time) とは異なり、N₁ が特定の時間に限定するための意味的対比を担っていない。もう一つの理由は、N₁ を共有する構成素集団の強勢位置に関するバイアスに関わるものである。fellow man, straw man, set piece, country house, front room は、LPD3 において同じ N₁ を持った他の名詞 + 名詞複合語すべてが右方強勢を持っている。例えば、fellow man の場合、fellow creature, fellow feeling, fellow traveller と構成素集団を成しているが、これらはすべて右方強勢を持っている。したがって、構成素集団内でのアナロジにより fellow man は N₂ に強勢が置かれていると考えることができる。このことは、名詞 + 名詞複合語の強勢位置の決定に異なる力の間での競争が起こっていることを意味している。構成素の情報性という要因と構成素集団内でのアナロジとが異なる位置に強勢を置くよう指定し、それらが競争した結果、fellow man, set piece のような(5)のいくつかの例では構成素集団内でのアナロジによる指定の方が選ばれていると考えることができる。

IV. 結 び

この論文では、LPD3から採取した6,140例の名詞+名詞複合語を対象にして、その強勢位置が統語構造にもとづく分析、意味的性質にもとづく分析、構成素集団内でのアナロジにもとづく分析、情報性にもとづく分析によって正しく捉えられるかを考察した。それぞれの分析はいずれも一定の成功を収めていることが分かったと同時に、どの分析も名詞+名詞複合語の強勢位置に見られる変異を完全に捉え尽くしてはいない。すなわち、それぞれの分析が示す規則性は限られた範囲に留まっている。四つの分析の違いは、規則性を決めている基礎になっているものが形式か意味かという対立に限られず、伝統的な文法規則かアナロジや情報性の標示といったカテゴリーカルではない仕組みかという対立にまで及んでいる。さらに、それはどちらが正しくて（すなわち、どちらが実際に英語において働いていて）、どちらが誤りか（すなわち、どちらが実際には英語で働いていないか）という単純な二項対立でもない。むしろ、それぞれが異なる範囲で異なる効果をもたらしているという関係にあり、場合によっては競合が起こり、一方の仕組みが別の仕組みの効果を圧倒するということが、英語において起こっていることを示唆している。これらの異なる仕組みが名詞+名詞複合語という領域でどのような関係にあるのかについては、本論での考察からは分からない。興味深いこととして、よく似たことは名詞+名詞複合語の意味の側でも見られる（Ryder, 1994）。多様性が著しく、画一的な種類の規則性に還元できないが、全くの無秩序でもなく、複数の種類の規則性があちらこちらにおいて限られた範囲で起こっているという事象をどのように扱えばよいのか、今後の研究による、さらに進んだ解明を待ちたい。

注

- (1) アメリカ方言学会のウェブサイト (<http://www.americandialect.org/dumpster-fire-is-2016-american-dialect-society-word-of-the-year>) によれば、この語の意味は“an exceedingly disastrous or chaotic situation”であるとされている。2016年のアメリカ大統領選挙キャンペーンのコンテキストで特に頻繁に用いられたと説明されている。
- (2) これらの複合語のほとんどは、従来、 N_1 のための N_2 (N_2 for N_1) と分類されてきた。
- (3) Giegerich (2004) では、名詞プラス名詞という連鎖をもった形式が語彙化されているかを確かめる基準については、一般的なしかたで明確にされていない。
- (4) 転換はゼロ派生と呼ばれることもある形態論的派生の一つで、語形変化を伴わない品詞の変化が起こることを指す。
- (5) Plag, Kunter, Lappe, & Braun (2008: 780) は、この点に関して先行研究に見られる問題点として、(i)意味類を特徴づける意味範疇および意味関係が不明確にしか定義されていないこと、(ii)個々の表現がどの意味類に属するかしばしば曖昧である (ambiguous) こと、(iii)いくつの意味範疇および意味関係潜在的に関わってくるのか不明確であることを指摘している。
- (6) Lieberman & Sproat (1992) が「その他の例」として挙げているのは、以下の52例である。
 - (i) fly ball, discount bookstore, dictionary definition, capital gain, weather helm, industry leader, color monitor, trial run, combination lock, sacrifice single, round-trip ticket, gospel truth, battleship grey, blood relative, tramp steamer, return ticket, precision tool, race suicide, eggshell china, fossil man, sex

education, rogue elephant, touch football, ball bearing, fullback draw, championship series, party line, cash customer, child labor, chain reaction, touch typist, home run, string quartet, pony express, parcel post, police custody, polka-dot dress, box score, world bank, industry leader, cash course, crash landing, crack regiment, smash hit, snap judgment, bum rap, sponge rubber, college degree, shoestring tackle, bit part, barrier reef, toy gun

これらを意味的特徴にもとづいてまとめるのは難しいように思われる。このことは、(i)に挙げられたものが右方強勢を持っているのには、意味とは別の要因が働いていることを示唆しているように思われる。

(7) Bolinger (1958, 1972), Ladd (1984) は、この種類の意味的対立を潜在的対比 (implicit contrast) と呼び、潜在的対比がなされている構成素にはしばしば強勢が置かれると論じている。

引用文献

- Arndt-Lappe, S. (2011) Towards an exemplar-based model of stress in English noun-noun compounds. *Journal of Linguistics*, 47, 549-585.
- Bauer, L. (1998) When is a sequence of two nouns a compound in English? *English Language & Linguistics*, 2, 65-86.
- Bell, M. J. (2005) Against nouns as syntactic premodifiers in English noun phrases. *Working Papers in English and Applied Linguistics*, 11, 1-48. University of Cambridge, Research Centre for English and Applied Linguistics.
- Bell, M. J. & Plag, I. (2012) Informativeness is a determinant of compound stress in English. *Journal of Linguistics*, 48, 485-520.
- Bell, M. J. & Plag, I. (2013) Informativity and analogy in English compound stress. *Word Structure*, 6, 129-155.
- Bolinger, D. L. (1958) Stress and information. *American Speech*, 35, 5-20.
- Bolinger, D. L. (1972) Accent is predictable (if you're a mind-reader). *Language*, 48, 633-644.
- Chomsky, N. & Halle, M. (1968) *The Sound Pattern of English*. New York: Harper & Row.
- Giegerich, H. J. (2004) Compound or phrase? English noun-plus-noun constructions and the stress criterion. *English Language and Linguistics*, 8, 1-24.
- Giegerich, H. J. (2009) The English compound stress myth. *Word Structure*, 2, 1-17.
- Ladd, D. R. (1984) English compound stress. In D. Gibbon & H. Richter (eds.), *Intonation, Accent and Rhythm: Studies in discourse phonology*, Berlin/New York, de Gruyter, pp.253-266.
- Lees, R. D. (1963) *The Grammar of English Nominalizations*. Bloomington, IN., Indiana University Press.
- Liberman, M. & Sproat, R. (1992) The stress and structure of modified noun phrases in English. In I. A. Sag & A. Szabolcsi (eds.), *Lexical Matters*, Stanford, CA, Center for the Study of Language and Information, pp. 131-181.
- Olsen, S. (2000) Compounding and stress in English: a closer look at the boundary between morphology and syntax. *Linguistische Berichte* 181, 55-59.
- Plag, I. (2006) The variability of compound stress in English: structural, semantic, and analogical factors. *English Language and Linguistics*, 10, 143-172.
- Plag, I. (2010) Compound stress assignment by analogy: the constituent family bias. *Zeitschrift für Sprachwissenschaft*, 29, 243-282.
- Plag, I. & Kunter, G. (2010) Constituent family size and compound assignment in English. In S. Olsen (ed.), *New Impulses in Word-Formation* (Linguistic Berichte Sonderheft 17), 349-382. Hamburg: Buske.
- Plag, I., Kunter, G., & Lappe, S. (2007) Testing hypotheses about compound stress assignment in English: a corpus-based investigation. *Corpus Linguistics and Linguistic Theory*, 3, 199-232.

-
- Plag, I., Kunter, G., Lappe, S., & Braun, M. (2008) The role of semantics, argument structure, and lexicalization in compound stress assignment in English. *Language*, 84, 760-794.
- Roach, P., Setter, J., & Esling, J. (eds.) (2011) *Cambridge English Pronouncing Dictionary*, 18th edition. Cambridge: Cambridge University Press.
- Ryder, M. E. (1994) *Ordered Chaos: The interpretation of English Noun-Noun compounds*. University of California Publications in Linguistics, volume 123. Berkeley/Los Angeles/London: University of California Press.
- Schmerling, S. F. (1971) A stress mess. *Studies in the Linguistic Sciences*, 1, 52-66.
- Zwicky, A. M. (1986) Forestress and afterstress. *Ohio State University Working Papers in Linguistics*, 32, 46-62.